

戦時下における「前衛絵画」の展開——美術文化協会、吉井忠を中心に——

弘中 智子（板橋区立美術館）

本発表は、吉井忠（1908-1999）の日記や資料を手がかりに、日本におけるシュルレアリスム絵画の転換期が、福沢一郎と瀧口修造が逮捕された、1941年のいわゆる「シュルレアリスム事件」以前にあったことを指摘し、吉井をはじめ美術文化協会の画家たちが戦時下においても引き続き「前衛絵画」を追求し続けたことを、吉井の作品や日記、発言をもとに明らかにすることを目的としている。

吉井は、20歳で帝展に入選した後、1936年の約10ヶ月の渡欧を挟む時期にシュルレアリスムに影響を受けた絵画を発表していたが、その後1940年頃より、次第に西洋の古典絵画の技法を用いて、日本の風景や人物を描いた作品を発表し始めた。彼がこの転換期に所属していたのが美術文化協会である。同会は、吉井と同様にシュルレアリスム絵画を試みていた画家を中心に1939年に結成され、当初より「左翼的文化運動」団体として監視されていた。その理由として、フランスのシュルレアリスム運動が共産主義に傾倒していたこと、日本のプロレタリア美術運動に関係した画家が会に参加していたことが挙げられる。そして、会の代表者であった福沢は、シュルレアリスムに共鳴し啓蒙した画家として1941年に検挙された。

これまで、福沢の逮捕を境にして日本のシュルレアリスム絵画は衰退したと考えられていたが、吉井の日記からは、美術文化協会が結成される頃には、既にシュルレアリスム絵画を描く団体に対する監視が強まり、会は結成直後からシュルレアリスムに偏ることのない「前衛絵画」を模索したことが読み取れる。実際、結成時の声明で同会は「前衛団体」であり、固定した観念や表現形式を打破することを目的に挙げている。

吉井の作品は、会がその方向性を定めるのと同調するように、西洋のシュルレアリスムの模倣から、日本のモチーフを用いた、写実的な表現の作品へと展開していく。シュルレアリスム事件後の吉井の日記には「視覚から来るもの」を描くと同時に独自の前衛絵画を模索することの苦悩が綴られている。

発表では、まず、吉井の作品を例に日本のシュルレアリスム絵画の流行とそれに対する抑圧が美術文化協会結成以前から始まっていたことに加え、特別高等警察などによる監視のもと、会が「前衛絵画」をどのように定義し、取り組んだのかを吉井の日記、雑誌『美術文化』に掲載された文章と作品図版から明らかにする。そのうえで「シュルレアリスム事件」以後に、美術文化協会が行った戦争画の展示や軍への献納などの事実を確認しながら、これまであまり研究されることのなかった、その後の「前衛絵画」について考察する。これにより、美術文化協会の結成時には既に日本に於けるシュルレアリスム絵画は衰退期に入っていたことを立証し、また事件後も、監視下で、吉井をはじめとする画家たちにより「前衛絵画」の模索が継続していたことを紹介したい。